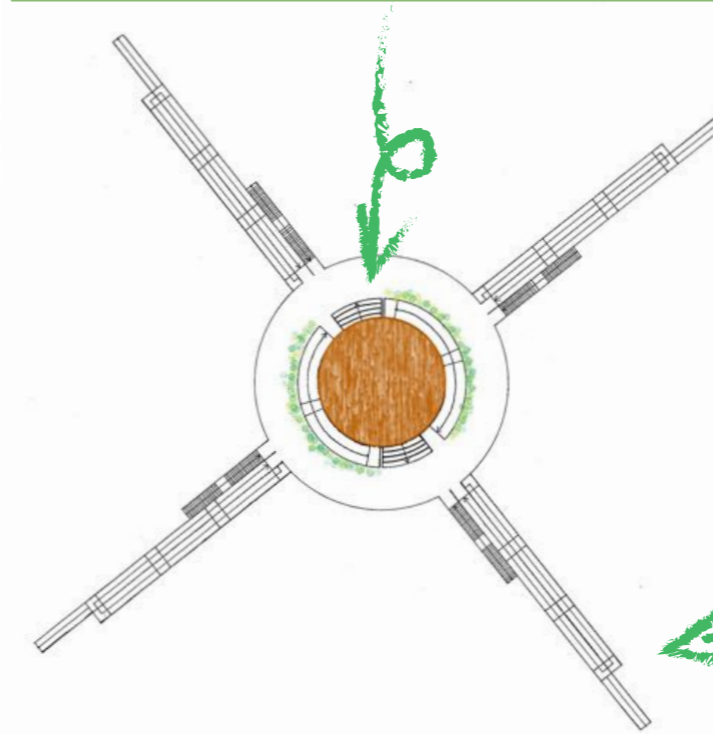
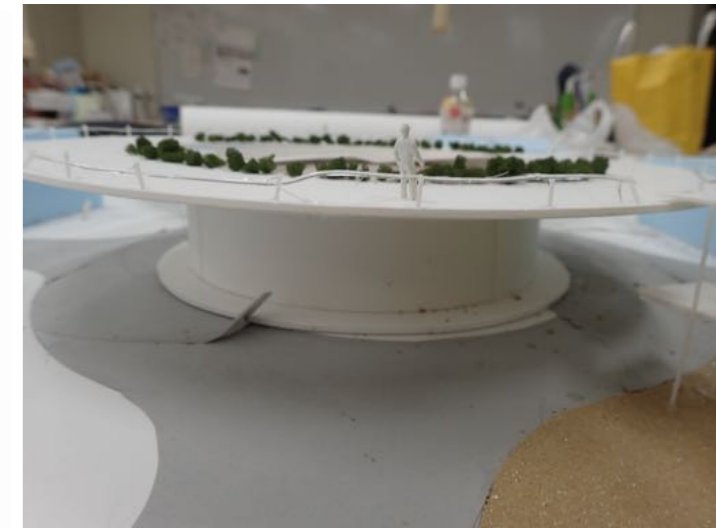
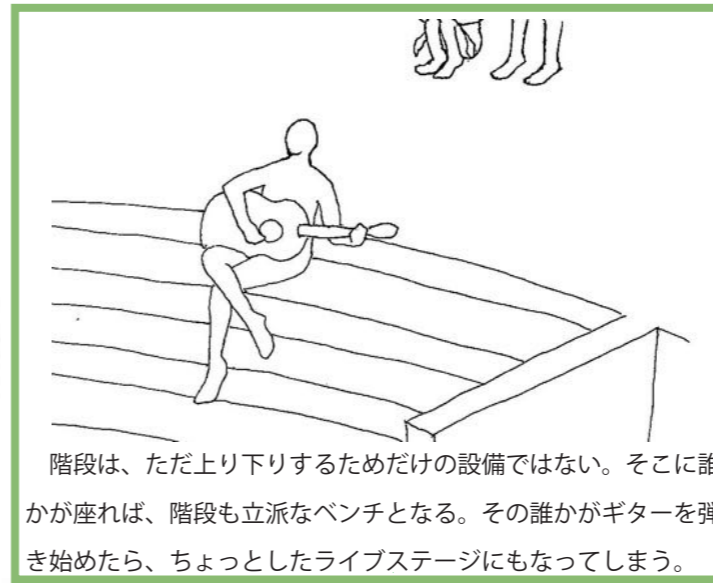
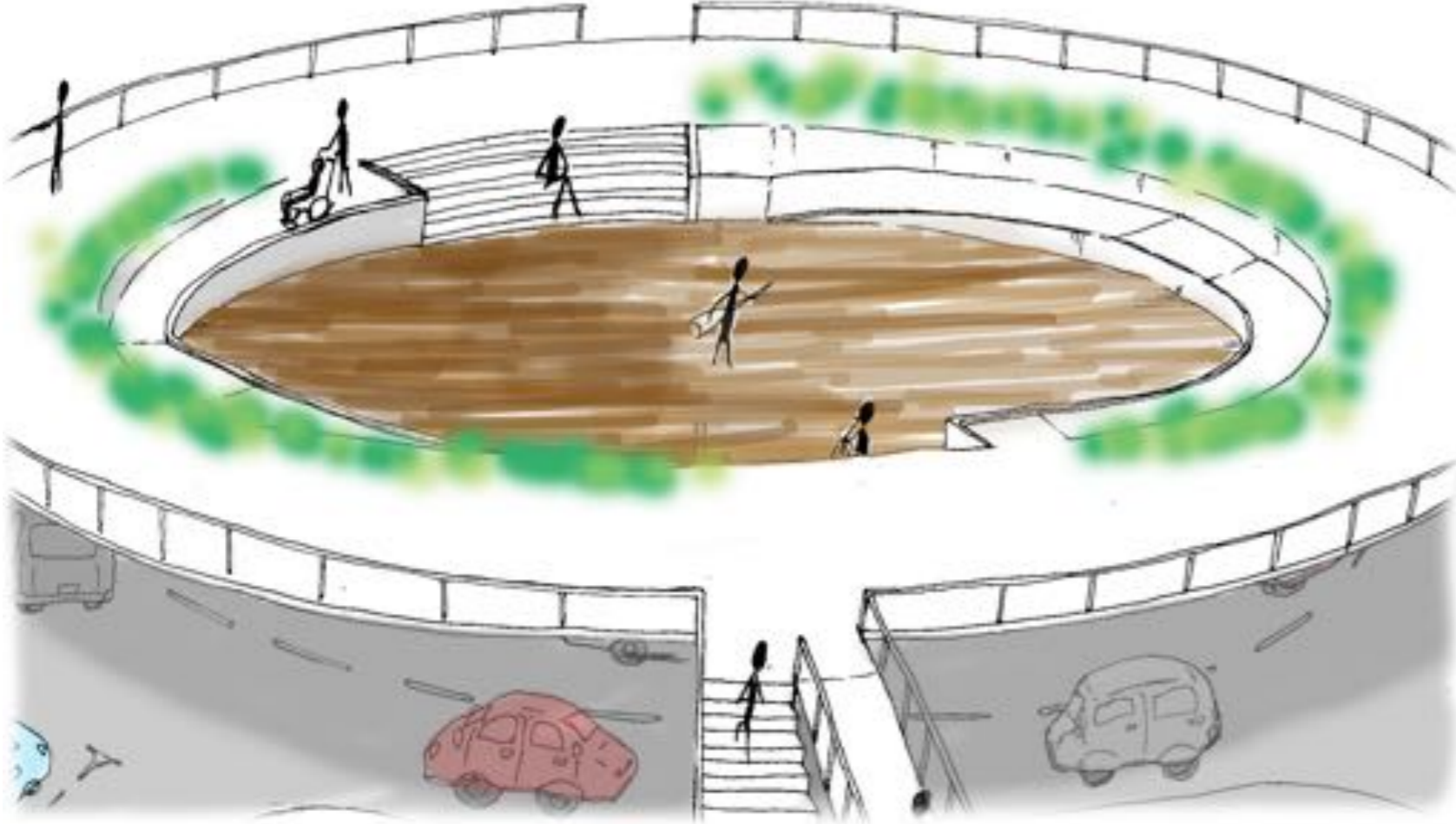


つなぐ『わ』

この建造物は街の心臓である。心臓から血液としての人が送り出される。ここに吸い上げられ、再び送り出されることから、周りの街が活性化していく。多くの人々がここに集まることで、更に人が吸い寄せられる。このようにして、街は相互に発展する。



大きく張り出したスロープは、勾配が緩いため、お年寄りや車椅子に乗った人も楽に上ることが出来る。入り口付近は、頭上が覆われていないため、開放的で入りやすい雰囲気。

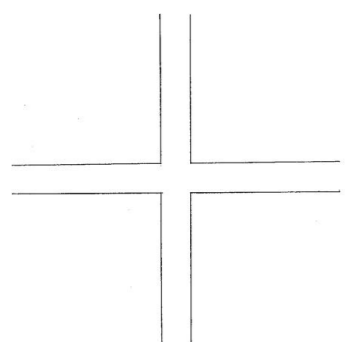


広場の下は災害時のための備蓄庫となっている。この歩道橋を目指して避難してきた人々を迎え、人々はここを拠点として、再び普段の生活を取り戻していく。

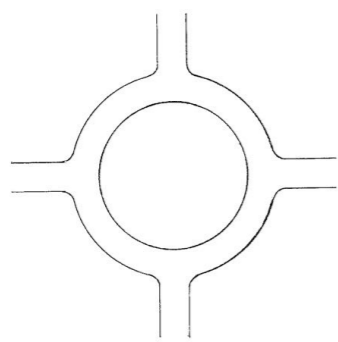


今回私たちが選択した敷地は、富山県高岡市に位置する交差点。半径100メートル付近には保育園と病院がある。さらにこの交差点を北上すると、国宝瑞龍寺の参道に突き当たる。そのような場所であるにもかかわらず、この付近は空き地が多く、交差点脇の公園も賑わいが無い。理由の一つに、この付近には人々が安らげるような場所が、動線にないことが挙げられると考えた。私たちは『道』と『歩道橋』を題材として、本来合理的とはされない使い方を提案することで、逆に人々が自然とそこに集い安らげる、結果として合理性を持つ空間を提案する。ここで示すのは合成の誤謬からの脱却の一例である。

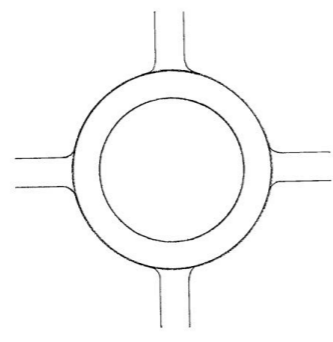
diagram



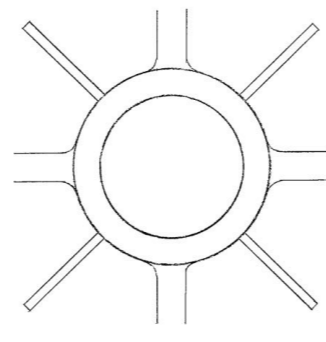
普通の交差点
人はただ通過するだけ



ラウンドアバウトにする
車通りがスムーズに



円形の歩道橋をかけ、中心に広場を設ける
人が自然と渦を巻いて集まる



道路と合わせて太陽に見えるように
スロープや階段を配置する

公共交通機関が整備されていないだけに、車優先の社会になってしまっている高岡において、人はとかく狭くて暗い地下道を通ることを強制されてしまいがち。ならば、車優先であることはそのままに受け入れつつ、人には頭上の開放的で明るい場所を通ってほしい。このように考えた時に、歩道橋とラウンドアバウトの双方を活用するに考えに至った。ラウンドアバウトの直径を大きく取ることで生まれた開放的な空間で、人々は思い思いに自分の刻を過ごす。その特徴的な形が、記憶の中に根付くことで集会所やその他の活用できる場所として集団に認知され、人が集まってくる。

